

スリンの「異世界」を 逍遙する

津村 文彦
つむら ぶんひこ
福井県立大学准教授

タイでは、マスメディアの影響などで、お化けやまじないが東北部の地方イメージとしてすっかり定着している。なかでもカンボジアと国境を接するスリン県は、まじないのメッカといってもいいほどだ。スリンには、カンボジア語と同じ系統のことをばを話すクメール系民族の呪術、邪術の使い手たちが、とくろを巻いている。



象以外のもうひとつの名物

タイのスリン県といえば象祭りが「名物」だ。地域振興のため一九六〇年代に始まった毎年一月の象祭りには、タイ全土から象と象使いが集結する。象サッカーや騎象戦などが催される。世界中から観光客も訪れる。そんなスリン県のプラーサート郡に足を運んだのは、二〇一〇年三月のことであった。じつは、もうひとつのスリンの「名物」が目当てであった。

スリン県にはクメール系民族が多い。東北タイのラオ系民族のあいだでは、クメールの多い地域に行った人が原因不明の病にかかると、「呪術にやられた」とみなされ、「クメールに当たる」と語られる。滞在中世話になったクメール系の知人の家でもこんなことがあった。娘が他県の大の友人たちを自宅に招待していたが、直前になって突然キャンセルされた。「呪術が怖いからやめておくように親にいわれた」からだという。クメール系ではない多くの「タイ人」にとって、スリンは、強力な呪術のはびこる、「異世界」として認識されているようだ。



老呪術師と彼が受け継いでいる呪術書

タイやラオの呪術は弱つちい

スリン県プラーサート郡の村落を案内してもらいながら歩いてみた。生活態度の悪い嫁に使い魔を送って呪い殺したという姑呪術師の家、シロアリの塚を壊したために土地神に呪われてしまった教師が勤める小学校、村の女性と結婚した白人が墓場の上に建てて悪霊が出没する西洋風住宅など、背筋の寒くなるようなエピソードが、村のなかの個別の場所と結びついて次から次へと語られる。

「ルーシー」とよばれるむかしの修道者を取り憑かせて日常の些事を占う占師やら、深い腹想に入って「心を脱ぐ」と遠くの場合所に自らを顕現させることができるという八七歳の老呪術師なども村に住む。「ラオの村では『クメールの呪術は強力だから注意しろ』とよく語られる」とわたしがいうと、その老呪術師はニヤリと笑った。「たしかにタイやラオの呪術は弱つちい」。

だが「プラーサート郡の呪術はたいしたことはない」とも当地では語られる。もつと強力なのは、象使いで有名なクイ族、それに「低いクメール」の呪術だという。「低いクメール」とはドンラック山脈の向こう、つまりカンボジアに住むクメールを指す。その老呪術師は、若いころカンボジア国境の森に入って薬草の採集に勤しんだ。森には「低いクメール」の呪術師もいて、彼らから呪術や薬草の処方を受けたという。

プラーサート郡から南東に五〇キロほど国道を進むと、カンボジア国境チョンチョムに至る。国境の少し手前に市場があった。なかに入った途端、女性の物乞いが近づいてきて抱いた子どもを見せる。一歳ほどの男の子の膝には大きな裂傷があり、蠅がたかかって黄色く変色した傷口の奥には白いものまで見える。そこを過ぎると「一パツでいいからおくれ」とタイ語で乞う少年たちに取り囲まれる。市場の売り子も、ほとんどがカンボジアからやって来た「低いクメール」である。古着、日用品、電気製品、中古自転車などが店先に並び、なかには呪術の道具も売られている。ナーリボンとよばれる人の形をした呪具は恋愛呪術に用いられるという。

オスマックのカジノでタイ人に勝ち目はない

市場では、この場に似つかわしくない小綺麗に着飾ったタイ人グループもしばしば目にする。大型バスに乗って、団体でこの地を訪れる彼らの目当ては、もちろん市場ではない。カンボジア側の国境の街オスマックにあるカジノである。週末には多くのタイ人が「攫千金を夢見て押し寄せる」。

「あのカジノの中央にある柱の下には、（低いクメール）の呪術師が埋められている。だからこれだけ多くの客を集めているのだ」プラーサート郡の知人が教えてくれた。「低いクメール」の強烈な呪術の庇護下にあるカジノでは、タイ人に到底勝ち目はないだろう。



車を止め、歩いて国境を越えて、カジノに向かう



寺院での悪運払い儀礼。仏像・僧侶と信者が聖糸で結ばれる



占師の憑依。はるかむかしの修道者ルーシーをとり憑かせて占う



装身具に混じって、市場で売られる呪具ナーリボン